

地域資源を活かす養蜂



あつや 寺田 篤哉さん
 さいたま市出身。山梨学院大学に駅伝特待生で入学。怪我をした時、ミツバチの針を患部に刺す蜂針療法と出会い、蜂について勉強。養蜂の世界にのめり込む。

み
 なさんは越生町で養蜂を営む方が移住していることをご存じでしょうか？このページでは昨年4月に越生町に移住した寺田篤哉さんをご紹介します。

移住した経緯を教えてください

新規就農を目標に埼玉県農業大学校に入学しました。農業大学校では、花き専攻。農業経営やミツバチと相性の良い（ハチミツの採れる）植物の栽培方法を学びました。

農業大学校で、上野東の梅農家である山口農園の山口由美さんの講演に感銘を受け、越生町での新規就農を決意。泊まり込みで研修も受けさせてもらい、昨年4月から越生町に住み始めました。

越生町では、新規就農者に成木した梅の圃場ごと農地を貸してくれるので、初年度からまとまった収入を得ることが出来ました。私も成瀬区で40本の成木林を借りて、梅の栽培もしています。また、梅の受粉にはミツバチが必要なので、私がミツバチと一緒に越生町に移住する事で、地域の産業に貢献できるのではないかと考えました。



▲燻煙器（火を焚いて煙の出る機器）を使い、ミツバチの動きを鈍くしてから撮影を行いました。

養蜂の良いところ

養蜂は「地域資源を活かす」産業。ミツバチは巣箱から半径2km〜3kmの花からハチミツを集めるので、その地域独特のハチミツの味を楽しむことができます。

ミツバチが住みやすい環境を整えることが、里山保全にも繋がります。ハチに刺されたら痛いので、近くでミツバチを飼っていると怖い思いをさせてしまいますが、越生町の方々には暖かく受け入れてもらっています。



▲手のひらでハチミツを飲むミツバチ

現状の課題

ハチミツが採れる花（蜜源植物）の開花時期（3月下旬〜5月下旬）が短く、通年で収穫量が安定しないので花を増やす活動もしていきたいと考えています。

ニセアカシアやビービーツリーなどの樹木を植えていきたいです。

越生町はスズメバチが多く、ミツバチが襲われてしまっています。対策としてネットを被せてミツバチを守っています。一方、その多くのスズメバチが他の害虫を食べてくれるから、梅の木が守られている側面もあります。



▲蜜箱のミツバチ達。背が黄色く大きいのが女王バチです。



▲梅の花粉を集めるミツバチ

ハチのこころがすごい！

社会性昆虫で分業ができるところがすごいです。働き蜂の平均寿命は、約42日（6週間）。

前半の3週間は内勤蜂として、巣箱の中で幼虫のお世話や掃除、花蜜をハチミツに変えるお仕事をしています。

後半の3週間は、外勤蜂として外に花蜜や花粉を採りに行くお仕事をしています。

越生町と養蜂について

梅の里越生町での養蜂の最大のメリットとして、梅の花の受粉があります。ミツバチが訪花することによって梅は多く実をつけます。梅の開花時期にミツバチの巣箱を設置

これからの活動について

現在越生町で60群（※）のミツバチを飼育しています。今後飼育群数を増やし、ハチミツの販売だけでなく、近隣のイチゴ農家に交配用のミツバチの販売も行っていきたいです。

ハチミツは8月上旬から隣のJA直売所などで販売開始予定です。電話をいただければ、町内ならお届けいたします。

群（※）1匹の女王バチを中心とした働きバチと雄バチの群れ

寺田 篤哉
 090-7274-2424



▶大台区の巣箱

